

# 古文化

受け継がれる、日本屋根の伝統美。

第116号



國前寺 本堂  
[広島市東区山根町]



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

# 自昌山 龍華樹院 本山 國前寺 [広島市東区山根町]

## 開創

日蓮聖人の御遺命により、皇室奏聞・帝都弘通の洪業を果たされた日像上人は、次の宿願を果すべく、この広島に錫を進められた。

上人は、25歳の折、鎌倉由比ヶ浜での厳冬一百日の苦修錬行を積まれ、満願の日に波題目を感得されている。また、日蓮聖人の大曼荼羅が「七浦様」に授与されていたため、日像上人にとって海の守護神である七浦様に参詣して、この曼荼羅を拝し、当地に法華經の教えを弘めることは念願であった。七浦様とは現在、観光地で名高い安芸の宮島の別称で、七面天女と共に陰陽二体の法華經守護神と伝えられている。

## 縁起

暦応3年(1340)、当地を訪れた日蓮の弟子日像上人によって開山。開基は日像上人に師事した暁忍。もとは真言宗寺院であったが、上人の教化によって暁忍が帰伏改宗し、当初は暁忍寺と称した。その後、明暦2年(1656)、二十世日勝上人の代に藩主浅野光晟、夫人の自昌院(前田利常の姫)の帰依により、寺領二百石を拝領、七堂伽藍が完備され浅野藩菩提寺國泰寺の「國」、自昌院(満姫)生家前田家の「前」を取り國前寺と改称された。

## 本堂・庫裏(重要文化財)

本堂は寛文11年(1671)建立。寄棟造の二重屋根で、向拝は唐破風造、本瓦鍔葺<sup>しころぶき</sup>の屋根をもつ仏間が背面に突出している。全体的には住宅風な意匠で造られている。庫裏は切妻造に本瓦鍔葺の屋根をもつ。江戸時代初期の頃、江戸を中心に、広島でも多くの寺院がこの様式で建立されたが、現存しているものは少ない。

本堂・庫裏ともに耐火の目的で外壁を白く塗籠<sup>しころ</sup>にしてある。これは、もっぱら城郭建築や土蔵造などで用いられ、社寺建築では全くといっていいほど見られない。日蓮宗の本堂は、西日



稲生武太夫の体験を描いた絵巻物「稲生物怪録絵巻(いのものけろくえまき)」 國前寺所蔵



天保11年(1840)に建築された山門(市指定重要有形文化財)

本では古い遺構はあまり残存していないが、その中にあって、國前寺本堂は規模も大きく堂々としたもので、藩を代表する近世の社寺建築として非常に価値が高い。

本堂については平成18年(2006)に大修理が行われており、往時の佇まいを今に伝えている。

## 國前寺稲生祭

江戸時代中期、浅野藩に稲生武太夫という剣技にすぐれ、兵法指南の男がいた。この武太夫は、ばけもの退治の名人でもあり、各地で天狗・狐狸の如き妖怪の退治にあたり名声を高めていた。ある日、武太夫の勇氣に恐れ入ったばけもののが大将がやって来て、降参を申し出て木槌を置いて帰っていった。この木槌を贈られてからというもの、ますます武太夫の武勇伝は格別のものとなったという。

武太夫から奉納された木槌は「ばけもの木槌」と呼ばれ、國前寺稲生祭では木槌の入った厨子を開帳し、法要を行う。100日間の修行をした僧侶十数人による読経が始まると、その厨子が祭壇中央に運ばれてくる。毎年1月に行われる國前寺稲生祭は、江戸時代の宝暦年間から約250年間続いてきた行事で、毎年300人以上の人が集まる。

で開帳される「ばけもの木槌」の入った厨子



※鍔葺とは…屋根の途中で段がつく葺き方

# 主任文化財屋根葺士 検定会 実施される

檜皮・柿葺【第17回】●平成29年10月16日(月)～10月21日(土) / 5名(檜皮葺師 うち1名は学科のみ)

茅 葺【第9回】●平成29年10月16日(月)～10月21日(土) / 2名(うち1名は学科のみ)

平成29年度主任文化財屋根葺士検定会を兵庫県丹波市の丹波市ふるさと文化財の森センターにて行いました。5日間にわたる検定会のうち、指定屋根模型を使用した実技検定には檜皮葺4名・茅葺1名が臨みました。最終日には檜皮葺1名・茅葺1名が加わり、檜皮葺5名・茅葺2名による筆記試験を行いました。

今回は検定員として、(公社)全国国宝重要文化財所有者連盟 常務理事 事務局長 後藤佐雅夫様をはじめ、京都府、滋賀県、奈良県、(公財)文化財建造物保存技術協会の各文化財修理担当の先生方と当会監事及び理事等正会員があたり、檜皮葺合格者3名、茅葺合格者1名という結果になりました。不合格となられた方につきましては、今回の結果を今後の自己技術の向上に繋げられ、次回合格を目指して再度頑張ってください。



## 主任文化財屋根葺士 認定証 更新講習会 開催

平成29年度主任文化財屋根葺士認定証更新講習会を平成29年11月25日(土)、京都市文化財建造物保存技術研修センターにて行いました。

この更新講習会は、主任文化財屋根葺士の認定を受け、更新から3年を経過した者を対象に行うものです。今回は、(公社)全国国宝重要文化財所有者連盟 常務理事 事務局長 後藤佐雅夫様を講師に、14名の受講生を対象に日本建築史、社寺建築等の講義を行いました。この講習が新たな発見、知識の充足に繋がるものと考え、今後の仕事にも生かして頂きたいと思っております。



## 平成29年度 檜皮採取者(原皮師) 17期生 終わる

平成29年度の檜皮採取者(原皮師)初級養成研修事業は、4名が入講し、8月21日から京都市文化財建造物保存技術研修センターで座学や採取研修に使う自分のへら作りなどを行った後、9月4日より大阪の河内長野市市有林に入山し、実技研修を開始致しました。

今年度は、採取経験者もあり、研修開始当初はかなりの技術差がありました。未経験者は、大きな焦りがあったと思いますが、10クールに及ぶ研修で様々な指導員

から指導を受け、また経験者も他者の技術を学び、それぞれに技術進歩したと思います。

研修で学んだ技術を1日でも早く自分のものにし、檜皮茸を支える職人になれるように、来年度からは中級研修生としてより一層の努力を期待したいと思います。

この研修にご協力頂いた山林所有者と国有林の関係者の皆様に感謝申し上げます。



# 平成29年度 檜皮採取者(原皮師) 中級研修 終わる

平成29年度の檜皮採取者中級研修は、25名の研修生で研修事業を行い、9月4日の奈良の地獄谷国有林に6名が入山し、研修を開始しました。2月16日まで3～6名でそれぞれ15クールに分かれ、1人3クールずつ参加しました。

今年度は、12月から2月の間が例年に比べ大変厳しい寒さとなり、山での研修はかなり辛いものになりました。そんななかではありましたが、近年、中級者の技術が向上し、スピードアップが計られ、採取量も増え

てきました。今後も研修生同士が切磋琢磨し、より高い技術を維持し、檜皮葺屋根の質の向上と維持に貢献してくれるものと思います。

今年度も研修林を提供して頂いた近畿中国森林管理局、中部森林管理局の各国有林の関係者の皆様、河内長野市、京都大学、九州大学、またその他私有林の山林所有者の皆様には感謝申し上げますとともに、今後ともご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



# 平成29年度 ふるさと文化財の森 「森が支える日本の技術2017公開セミナー」開催

今年度は、柿葺に焦点をあてて事業を実施しました。セミナー開催期間中は、多くの参加者に来場して頂き、我々の技術やそれを支える資源について周知することが

できたのではと感じています。ご協力頂いた関係機関に対し、この場を借りて深く御礼を申し上げます。

## 開催内容

名 称 ● 平成29年度 ふるさと文化財の森「森が支える日本の技術2017公開セミナー」

主 催 ● 公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

期 間 ● 平成29年11月3日(土)～4日(日)、12月8日(金)

会 場 ● 清水寺 境内(京都市東山区清水1-294)

京都市文化財建造物保存技術研修センター(京都市東山区清水2丁目205-5)

高台寺山国有林(京都市東山区)

国宝 清水寺本堂 保存修理現場(京都市東山区)

鞍馬山国有林(京都市左京区)

参 加 者 ● 約2,500名

共 催 ● 京都市

後 援 ● 京都府教育委員会、京都市教育委員会、林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所、  
公益財団法人 大学コンソーシアム京都、公益財団法人 京都古文化保存協会、  
公益財団法人 京都市文化観光資源保護財団

### (1) 将来の担手養成に関するプログラム

1. 文化財講座
2. 保存修理現場見学



(1) - 1

京都市文化財建造物保存技術研修センター



(1) - 2

清水寺 本堂

(2) 資材採取方法の実演、展示、研修

1. 檜皮採取実演
2. 資材確保への取組（パネル展示）
3. 資材の重要性の理解、採取方法を習得するための研修（ヒノキの植樹）



(2) - 1

高台寺山国有林



(2) - 2

京都市文化財建造物保存技術研修センター



(2) - 3

鞍馬山国有林

(3) 文化財講演会



京都市文化財建造物保存技術研修センター

(4) 「未来につなぐ匠の技」～伝統的屋根工事技法の紹介～



清水寺 境内

(5) へぎ板ワークショップ ～子供向けプログラム～



清水寺 境内

(6) パンフレット等広報物の配布



清水寺 境内

(7) 京都府名誉友好大使の活用



清水寺 境内

(8) 特設 HP の作成と SNS を利用した広報の実施

# 平成29年度 特別講座 開講(全3回)

## 第2回「蘇山そざんの青瓷せいじ」



蘇山窯  
四代 諏訪 蘇山

日 時 ■ 平成29年10月28日(土) 14:00～16:00  
会 場 ■ 文化財建造物保存技術研修センター

日本に伝来し、茶の湯の流行とともに貴重な道具の一つとして珍重された「青瓷」。その美しさに魅了された初代蘇山の原点と青瓷という焼き物に込められた想いを、四代 諏訪蘇山様にお聞きします。

### 【講演内容要約】

## 才能の片鱗を見る

初代蘇山は、嘉永4年(1851)に加賀藩士の子として金沢に生まれました。11歳で父を亡くした後、武芸を学び、14歳で家督を相続しますが、明治維新で武士は廃業となりました。明治元年(1868)、海防のために創設された加賀藩洋式兵学校「壮猶館そうゆうかん」の教師となり、軍事技術の研究と開発に力を注ぎました。科学に基づく西洋の学問に触れ、後の作陶において大いに活かされたと言われています。その後、軍人として生活しましたが、21歳の時に軍を離れ、明治5年(1872)に金沢航海学校に入学。在学中に水産講習所で教員となりますが、捕鯨用麻縄や缶詰、燻製、塩漬けなどの様々な研究や発明ができる器用な人であったようです。

## 原点となる必然の出会い

明治6年(1873)、23歳の時に九谷焼の絵付けをしていた彩雲楼旭山さいうんろうきよざんに陶画というものを初めて学び、焼き物の道に入ります。翌年、彩雲楼旭山の娘と結婚し、明治8年(1875)、東京に移って陶画の商売を始めます。その頃、隣家に住んでいて、日本美術に深い関心をよせていたアメリカの哲学者 アーネスト・フェノロサから、毎日美術工芸の話聞き、また、来日後に化学の知識を基に日本の窯業に深く関わっていたドイツの博士 ゴットフリード・ワグネルから化学を学びました。この2人との出会いは、後の人生に大きな影響をもたらすことにな

ります。

東京に移った翌年には、陶器製造所を設けて陶像、石膏像の製作、模型の捻造を始めます。日本は明治になり開国するまで、石膏の技術がなかったため、型打ちの皿などは素焼でつくられていました。石膏が使用できるようになったことで石膏型による陶彫(陶磁彫刻)することに傾注していったようです。初代蘇山の陶彫の技術は素晴らしく、対象物を見るのは1度限り、それだけで最後までつくり上げるのですが、その方法でなければ自分の心がそこに入っていくかないということでした。

後の初代ですが、石膏型を用いて青瓷の作品をつくっていた理由は、あくまでも一つ一つを完璧に焼くためであって、決して大量生産を目的にしたものではありませんでした。特に青瓷は大きなものほど効率が悪くなるため、石膏型を使うことが多かったようです。

## 名跡となる名の由来

さて、明治10年(1877)から1年間は瀬戸、京都の製陶所を視察して回りました。その後、福井県や石川県など北陸地方各地で陶器製造の改良や指導に携わり、また銅を焼き物に使う方法などの指導も行いました。明治13年(1880)、九谷陶器会社に招かれます。そして、明治15年(1882)、31歳のときにいよいよ青瓷の研究に着手します。明治20年(1887)、金沢工業学校の開校から後進の育成に努力し、明治22年(1889)には、石川県立工業学校の教員



講演風景

となりますが、43才の時に大病を患います。その時、金沢市内の来教寺にお参りをしたところ病が治ったことから、蘇起を喜び、このときに「蘇山」と改名しました。

その後、腕も上がり、京都にも名が知られるようになり、明治33年(1900)、50才の時に京都の錦光山製陶所に招かれました。そして、明治40年(1907)、57才の時に京都の五条坂に窯を構えて独立、様々な作品を試みるようになりました。

## 追求めた砧青瓷

中国では、今から2000年ほど前に青瓷らしきものができたと考えられています。中国は磁器となる土がたくさん取れることから、温度や窯や釉薬の改良を加え、美しい青瓷が完成したのは南宋の時代でした。12世紀頃から北宋～南宋～元～明と時代が移りますが、「官窯」とは、宋の時代に設置された宮廷のためだけに陶磁器を製造する政府の陶窯のことです。官窯青瓷は、釉薬に鉄分を多目に入れて厚く掛けるため、貫入(ひび模様)が入ります。そして、口縁の釉が薄くなった部分は紫色に、足元の高台部分は褐色になる「紫口鉄足」が特徴です。

一方、「龍泉窯」とは、貿易のために製造する民間の陶窯のことです。そこで生まれた青瓷を、砧青瓷、天竜寺青瓷、七官青瓷と呼びますが、初代蘇山が最初に始めた研究は、明時代に焼かれた七官青瓷でした。その後、各時代の青瓷も研究した結果、南宋時代に焼かれた砧青瓷の素晴らしさに行き着いたのです。砧青瓷を再現するため、陶片をもらってきては、フェノロサの知識やワグネルから学んだ化学的なことも加味しながら分析を繰り返しました。そして、釉薬を研究する人が多い中、素地に依るところが大きいことを発見した初代蘇山は、その後、独自となる土の調合を導き出しました。割れた断面が青いのは蘇山窯の特色の一つです。

## 蘇山窯に向き合う「心」

京都は磁器となる土が取れませんので、他から調達しなければなりません。鉄分とかコバルトマンガンなどを入れた素地を白い磁器の土に混ぜたものに、鉄を着色剤とする釉薬を掛けて1200～1300℃の高温で還元焼成したものが青瓷です。還元焼成とは、酸素を奪った状態で焼かれることで、登り窯ですと空気の入ってくるのを塞いで、薪を不完全燃焼させるのです。釉薬や素地に微量に含まれる酸化鉄の酸素が奪われ、鉄は清澄な青緑色に生まれ変わります。素地づくりだけで相当手間の掛かるものですが、ちょっとしたことで色が変わってしまうので、調合には特に気を遣います。そして、形をつくっている間も、釉掛けをするときも、とにかく窯に詰めるまでは作品を何度もふーふーと吹きながら、目に見えない小さな鉄粉を付けないことに全神経を使います。もち

ろん、仕事場のあちこちを雑巾で拭いたり、錆びた物に触らないようにもします。鉄粉が付くと、焼き上げてから目に見える黒い点となって現れるからです。

また、現在、蘇山の窯は電気窯ですが、薪の量と空気の入加減と温度で焼け具合は変わります。還元されていると窯から炎が出てくるのですが、その炎の色、長さ、勢いを見て、窯の中がどれだけ還元されているのかを推し量ります。

## 持てる技を尽くした生涯

明治42年(1909)、初代蘇山の素地で焼成して出来上がった青瓷を、自分でも納得して世に発表したところ、大変な評価をいただきました。大正6年(1917)に宮内省から、現代でいう人間国宝(重要無形文化財保持者)に相当する「帝室技芸員」を拜命しました。明治23年(1890)から昭和19年(1944)までの間で、陶芸では5人しか任命されていない最高の名誉でありました。大正11年(1922)に生涯を終えるまで、初代蘇山は、「蘇山青瓷」と呼ばれる優れた作品を数多くこの世に残しました。

二代 諏訪蘇山は、初代の弟の次女として生まれた虎子を養女として迎え、大正11年に二代を襲名。三代 諏訪蘇山は、二代の弟の次男を養子として迎え、昭和45年(1970)に三代を襲名。平成14年(2002)に三代の三女である四代 諏訪蘇山に家督を譲りました。

初代から受け継いだ技術と精神を継承しつつ、独創的な作品にも取り組まれておられる四代 諏訪蘇山様。「蘇山の青瓷」とは、様々な人との縁だけでなく初代の知識や体験をはじめ、各代の経験や発想、閃きが今に生かされているように思えました。ただ新しいものばかりを求めるのではなく、道具としての美しさや作品の中の物語性を表現して創られる斬新な青瓷はとても魅力的で、真っ直ぐ向けられた「蘇山の青瓷」への想いを感じ取ることができました。お忙しい中、ご講演いただきまして、本当にありがとうございました。

### 四代 諏訪 蘇山氏 プロフィール

父 三代 諏訪蘇山・母 十二代 中村宗哲  
昭和45年に三女として生まれる。名は公紀(くき)。  
京都市立銅駝美術工芸高等学校漆芸科卒業。  
成安女子短期大学造形芸術科 グラフィックデザインコース映像専攻卒業・専攻科修了。  
京都府立陶工高等技術専門校成形科・研究科修了。  
京都市伝統産業技術者研修陶磁器コース本科修了。  
平成9年～16年、父と共に陶磁器の制作活動。  
各地にて中村宗哲展(天地のかたち・源氏物語)に出品。  
哲公房に参加。  
平成14年9月、四代 諏訪蘇山を襲名。  
平成16年、京都高島屋にて襲名展を開催。  
各地にて諏訪蘇山展を開催。

# 平成29年度 特別講座 開講(全3回)

## 第3回「京都洛中の酒造の歴史と食文化」



佐々木酒造株式会社  
代表取締役 佐々木 晃

日 時 ■ 平成30年2月17日(土) 14:00~16:00  
会 場 ■ 文化財建造物保存技術研修センター

原料がお米だけとは思えないほどの香りや味わいを醸し出す日本酒。古の杜氏たちが叡智と情熱で生み出した高度な製法は、世界に誇る醸造技術です。創業125年を迎える佐々木酒造の代表取締役 佐々木 晃様にお話しいただきました。

### 【講演内容要約】

### 洛中伝承の精神

京都の中心部・洛中の中心にある蔵元は、今でこそうち1軒だけとなりましたが、昔はたくさんありました。私の父が始めた昭和30年(1955)には30軒ほどでしたが、曾祖父が創業した明治26年(1893)には131軒あったということです。さらに遡れば、室町時代には350軒ほどあったと言われています。

水のきれいなところに造り酒屋ができると言われますが、原料となる米が収穫されるところにたくさんできるのです。では、なぜ米処ではない京都の町中に造り酒屋ができたのでしょうか。室町幕府になって、諸国の年貢米が三条室町に集まってくるようになりました。特に、献上米ですので、良質な米が集まってきます。京都には地下水がありますので、いい米といい水が揃ったわけです。当時は、造ったお酒の量に対して幕府に上納金を納めさせる、今で言う酒税が確立していました。それを十分な財源として、幕府が逆に京都の町中に造り酒屋を増やす支援をしたわけです。しかし、それは本当に小さな蔵元ばかりでした。広い場所や運搬の利便さを求めて徐々に伏見などに移転され大きく成長されている蔵元も、もともとは洛中の蔵元だったのです。

### 名水がもたらした京の発展

豊臣秀吉の時代に、京都の町中には御土居おどいと言われる内と外を分ける土塁の壁がぐるりと設けられていまし

た。その内側を洛中、そして外側を洛外と分けし、「粟田口」、「伏見口」など数箇所の関所を設けて洛外から入ってくる者を検分しました。秀吉は、邸宅「聚楽第」を洛中に建てましたが、この地を選んだ理由の一つに、水の良さがありました。

もともと京都上京の地は、良質の地下水に恵まれたところでした。千利休が茶の湯にも使った金明水、銀明水と言われる水脈があり、銀明水の湧く井戸水を仕込み水として使っています。関西大学 楠見教授の調べでは、京都の町の下には縦33km、横12km、一番深いところで水深800m、ラグビーボールを横向きにして水平に切ったような形の岩盤でできた水瓶があるそうです。京都は三方を山に囲まれた盆地になっていまして、それぞれ山の岩盤を伝って雨水が地中に潜り込み水瓶に溜まっていきます。また、その水瓶には出口が1本しかなく、常に水が溜まっている状態だそうです。世界的に見ても、このような地形は珍しく、京都に都が1000年続いた理由の一つであろうと考えられています。

### 酒蔵に求められる在り方

酒造りは寒造りと申しまして、1年で最も寒い冬場に酒造りを行います。そこで、冬季限定雇用の杜氏が活躍されていましたが、第一次産業の衰退もあり、季節的な人員確保が難しくなりました。酒造会社も、通年雇用として社員を確保しなければ、次の世代の職人が育たないという危機感をもち、夏場も稼働でき、春夏にも売れるお酒を造れないものかと考えていました。



講演風景(講演途中から、佐々木様のご厚意による試飲を楽しみました。)

「白い銀明水」という商品は、甘酒ベースのノンアルコール醸造飲料です。近畿経済産業局地域イノベーション開発事業で、平成20年(2008)よりプロジェクトマネージャとして産官学での開発を進め、平成23年(2011)に出来上がりました。米と米麴を原料とし、酒造の従来ある設備で夏季でも生産できる製品とすることができました。

## 唯一無二の醸造技術

日本酒は、①原料米の選定、②精米歩合、③酵母の選定、④造り方で決まります。

まず、原料米は普段私たちが口にする飯米とは違い、日本酒に適した酒米があります。兵庫の山田錦が有名ですが、いい米というのは日照時間、水温、昼夜の寒暖差など気候条件に左右され、農家の技術力では解決できないところがあります。佐々木酒造は全国新酒鑑評会で4年連続金賞をいただいているのですが、2年目は京都の契約農家でできた3等米の山田錦で受賞しています。米が大切なのはもちろんなのですが、特に大切なのは米に対する水分コントロールだと思っています。温度、浸漬時間から吸水率を計測することから始めます。

精米歩合とは、玄米を100%として、磨いた後に残っている部分の割合をいいます。吟醸酒なら60%以下、大吟醸酒は50%以下という規定があります。お米の外側はたんぱく質、脂質、ミネラルが多く含まれていて、たんぱく質は分解されるとアミノ酸になります。料理の世界では旨みとなりますが、日本酒では雑味となります。そこで、米を磨き上げ、真ん中のでんぷん質だけを残り、すっきりした味わいにするのです。お米には糖分が少ないので、このでんぷんを分解して糖化させる必要があるのです。また、酒米のさらに中心部にある心白というやわらかい部分は、米麴を造るうえで重要となります。

酵母は、麴で造った糖分を食べてアルコール発酵をしますが、このときに酸味や香りも生まれます。大半の酒蔵が使っているのが、日本醸造協会が頒布している「協会酵母」です。明治から様々な酵母が誕生しましたが、現在、改良を重ねた協会18号が、吟醸の香りをより多く生成すると鑑評会では大変な人気となっています。また、県やそれぞれの酒蔵でオリジナル酵母を培養しているケースもあります。京都では、15年ほど前に私も開発に携わらせてもらったのですが、「京の琴」という発酵力が強く、短期もろみでも香りが高くなる酵母が造られています。

## 米の醸造酒だからこその楽しみ方

まず精米したお米を洗い、水に浸けるのですが、この浸漬という手順がとても大事になります。それを甑という蒸籠のようなものに置き、1時間30分ほどかけてゆっくり蒸します。その後、蒸米をクレーンで吊って放冷機

に入れます。昔は人の手でやっていたのですが、これが大変な重労働でした。クレーンにしたことで、蒸米の重量が測れ、吸水率を計測できるようになりました。人の手でしかできない部分は大切にしながら、機械化を積極的に進めることも必要だと思っています。アルコール度数や酸度も測れますので、醸造途中で状態を把握でき、安定した酒造りができるようになりました。

次に、蒸米に麴菌を振りかける種切りをします。1日目は米の表面に麴菌がまわり、2日目に米の中心部にしっかりと麴菌が食い込みます。その食い込みを良くするのが心白なのです。麴、蒸米、水に別の部屋で培養しておいた酵母を加え酒母(酵母を大量に発酵させたもの)を造り、ここから何度かに分けて醪を仕込みます。発酵状態を見極め、压榨機で醪を搾り、酒を取り出します。

底冷えの時期に一番いい大吟醸を仕込んでいます。春先に大吟醸の新酒が、夏になれば冬に造って冷蔵貯蔵していた冷酒タイプのお酒や甘酒が、秋には冷やおろしという熟成酒が出てきます。日本酒の場合は半年で熟成完了しますので、米が収穫されて新酒ができるという一連のサイクルがきれいにまわっています。和食もそれぞれ旬の食材が季節によって巡ってきます。季節の料理とその時季にできた日本酒を味わっていただき、日本の食文化から季節の移ろいを楽しんでいただきたいのです。他のお酒にはない、日本酒の醍醐味ではないかと思えます。

「曾祖父の時代から続く酒蔵を残し、規模は小さいながらも次の代に繋げていくのが私の役目」と謙虚におっしゃる佐々木様。日本酒は一番売れていた昭和48年(1973)をピークに毎年5%ずつ生産量が減少しているそうですが、時代に合わせた製品づくりを心掛け、柔軟な取り組みをしておられます。「細々とでも続けてきて良かった」とのお話しぶりから、日本酒に込められた深い想いを感じることができました。新製品の開発秘話や醸造技術の難しさ、日本酒の楽しみ方など、笑いを交えての貴重なご講演をいただきました。お忙しい中、本当にありがとうございました。



左から吟醸「聚楽第」、白い銀明水

### 佐々木 晃氏 プロフィール

昭和45年4月1日、京都生まれ。  
大学卒業後、産業機械販売会社(関西日立機)に就職するものの、本来家業を継ぐ予定であった兄(俳優・佐々木蔵之介)に代わり、平成7年入社。  
平成20-21年、近畿経済産業局地域イノベーション開発事業・産学公連携による「米と米麴を使った食品原料」の研究開発事業でプロジェクトマネージャを務める。  
その成果物として平成24年4月よりノンアルコール飲料「白い銀明水」を販売。新しい酵母の開発や各種タイアップ・コラボ商品など、時代のニーズに合わせた商品づくりに努めるとともに、日本酒講座や京都の食文化についての講演、各種イベント企画を通じて新たな日本酒ファンを増やすことに注力している。  
●佐々木酒造ホームページ：<http://jurakudai.com/>

# 特別講座

【30年度の予定】

●定員は50名程度(参加費無料)

●参加希望の方は事務局までご連絡ください。

TEL 075-541-7727

## 第1回講座「禅の食礼からみる茶懐石」

日時 ● 平成30年6月9日(土) 14:00～16:00

会場 ● 京都市文化財建造物保存技術研修センター

懐石 万惣  
店主 中尾 英力



昭和46年11月16日生 富山県在住  
昭和47年 世界料理オリンピック(ドイツ)で日本人初となる金メダリストの父、中尾基平に師事。西洋料理を学ぶ。平成元年から藤本登志夫(京都)に師事。京懐石を学ぶ。全国の著名な茶人との交流の中、独学で茶道習得。平成13年 父が営む万惣を継ぎ、現

在に至る。  
平成17・18・19年 淡交社(京都)のカルチャー「懐石の頂き方」の懐石を担当。現在、懐石ケーターリング・懐石講習等、富山を中心に東京、京都、石川など全国を回る。一般社団法人 懐石協会 代表理事

## ご寄贈いただきました。

この度、(公社)全国国宝重要文化財所有者連盟 常務理事 事務局長 後藤佐雅夫様より重要文化財修理工事報告書他、計98冊をご寄贈いただきました。今後の保存会研修等での講義資料として大切に活用させていただきます。

後藤佐雅夫様には、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



## 発行所

京都市東山区清水二丁目 205-5  
文化財建造物保存技術研修センター内



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会

TEL 075-541-7727 FAX 075-532-4064  
<http://www.shajiyane-japan.org>

## 古文化 第116号

平成30年3月31日発行

## あとがき

熱戦を終えた平昌オリンピック・パラリンピックは、メダルの色や有無を超え、私たちに大きな感動をもたらしてくれました。日本代表の選手達は、日本選手団主将 小平奈緒が掲げた「百花繚乱」に相応しい、輝かしい活躍をされました。4年に一度の遠い目標に向かい、今ここを努力する選手の生き方に共感するからこそ、感動は生まれます。

仕事をしていると、当然苦しいこともたくさんあり、落ち込んだり、逃げ出したいと感じたりすることもあるでしょう。そんなときにでも、遙か先にある自身の目的をしっかりと見据えていれば耐えられ、日々の努力にも意味が生まれます。本当の成長とは、その苦しみを乗り越えた先にあるのだと教えられたような気がします。次回、東京オリンピックでは、どんな感動が待っているのでしょうか。

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

■ ふ る さ と 探 訪 ■

楠本 浩史さんの古里

「高野山開創1200年」

(和歌山県伊都郡高野町)

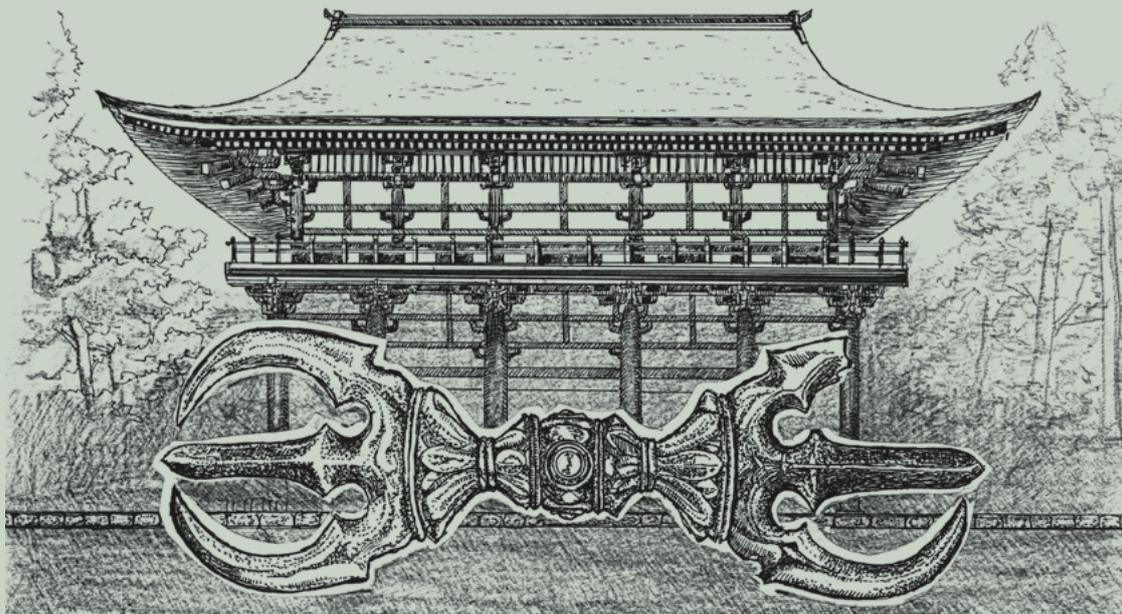
和歌山県の高野山中には真言宗総本山金剛峯寺を始めとする100以上の仏閣が点在し、楠本浩史さんが経営する檜皮葺古家は大小の伽藍に見守られるようにして建っている。平成27年は高野山開創1200年という記念すべき年にあたり、お山は大変な賑わいをみせた。

平安時代、中国に留学していた僧空海が帰国後に道場を開く場所を指し示すように願いながら投げた三鈷杵が高野山まで飛び、松の枝にかかって光り輝いていたとの伝承がある。飛行三鈷杵と呼ばれるこの法具は靈宝館の奥深くに秘蔵されて長く人目に触れる機会はなかったが、1200年記念として特別公開され大変な人気となった。80年余り厨子に納められていた金堂ご本尊の薬師如来や弘法大師座像の御開帳も行われた。

記念事業として実施されたのが、お山の中心部壇上伽藍の正門でありながら江戸時代に焼失して以来礎石だけが残されていた中門の再建だ。寒さ厳しい高野山には檜皮葺屋

根の建築物が多い。瓦だと表面に空いた小さな穴に水が入り、それが凍るときに割れてしまう恐れがあるからだ。172年ぶりに再建された中門も優美な檜皮葺屋根を頂いていて、これを手掛けた楠本さんも見上げる度に誇らしい思いを抱いておられるに違いない。再建に合わせて高さ約5mの増長天と広目天が新造され、江戸時代に造られた多聞天、持国天とともに巨大な門の四方を守る位置に安置された。木の艶も真新しい二天はそれぞれの胸元に彩色されたトンボとセミをあしらった奇抜なデザインが目を引く。新造においては過去の作風にとらわれず現代的な視点を取り入れたのだという。

高野山に117ある子院の半数ほどが宿坊を兼ねていて、申し込みばだれでも宿泊できる。靈気に包まれた山中で一夜を過ごし、夜明け前に起きて座禅に参加したところ、今まさに人生の折り返し点に立っていることを悟ったというものもいた。



(文・イラスト 米林 真)

# 古文化

第 116 号



公益社団法人 全国社寺等屋根工事技術保存会